

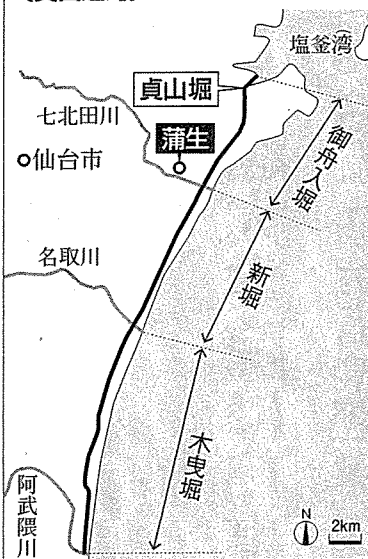
よみがえる 貞山堀の記憶

本社制作 戦前の映像見つかる

伊達政宗に由来し、県沿岸部を結ぶ貞山堀（貞山運河）Ⅱを撮影した戦前の映像が、朝日新聞社が当時制作した子ども向けニュースから見つかった。現在の仙台市宮城野区蒲生周辺に当たり、1940年前後の人々の暮らしの一端が映し出されている。東日本大震災で失われたふるさとの、貴重な記録でもある。

ニュースは123回上映。貞山堀のうち、塩釜湾から七北田川までの御舟入堀を本にも運河がある。宮城縣中心に、船上から撮影した「貞山堀」と題された回。とみられる。7・0キロの区間は、戦後の開発で埋め立てられるなどし、現存は4・4キロだ。

映像が撮られた当時の貞山堀（貞山運河）



映像は2分弱。松林が広がる中、かやぶきの民家が見え、刈りとった稲を積み上げた「にお」が並ぶ。幼子をおぶった少女らが立つ木の橋は、当時の高松橋らしい。藩政時代に米を荷揚げし、米蔵が置かれた「舟溜り」も川港として紹介され、護岸の石積みや小型船



貞山堀（貞山運河）

塩釜湾から阿武隈川まで、塩釜市から岩沼市までの沿岸部をつなぐ運河の総称。初代仙台藩主・伊達政宗のもと、舟運や谷地開拓を目的に江戸時代始めごろから建設され、政宗の贈り名「瑞巖寺殿貞山禅利大居士」から命名された。貴重な土木遺産だ。

塩釜湾～七北田川間の7.0キロが「御舟入堀」で、1673年に完成。県北と仙台を結び、米を仙台北に運んだ。七北田川～名取川間の9.5キロは「新堀」といい、明治維新後の土民救済事業として1870～72年に掘られた。名取川～阿武隈川間15.0キロが「木曳堀」。川村孫兵衛重吉の手で1601年ごろまでに築造され、城下町建設の用材運送に役立ったとされる。三つの堀は明治に入って拡張改修され、小型蒸気船なども運航していた。

2011年の震災では堤防が壊れ、堀ががれきで埋まるなどした。各地で復興事業が進められている。



現在の蒲生。七北田川（中央）から北（左上）の貞山堀は埋め立てられ、さらに集落が消え、造成地になっている＝11月28日、東日本放送提供

がとまっている様子がよくわかる。

ナレーションでは、貞山堀を日本の運河で「一番大きい」と説明、道路より舟運が物流を担っていたことを強調している。

当時を知る年配の元住民にとっては、懐かしい風景だ。蒲生・港町内会長を長く務めた平山勲さん（88）は仙台市太白区Ⅱによれば、堀の土手にパンツをひっかけ、橋の上から素っ裸で飛び込んでよく遊んだという。水もきれいで、石積みの隙間にいるウナギや、シジミをとっていた。平山家は商店を営んでいて、堀を往来する舟で塩釜から商品を仕入れたという。

蒲生地区はその後、大きく姿を変えてきた。

67年に始まった仙台港の建設工事に伴い、まず御舟入堀の北半分が消えた。80

遠藤怜子さん（72）は結婚から震災まで46年、ここで暮らし、津波で夫（当時63）を亡くした。「写真1枚残らなかったから、夫の生まれ育ったまちの様子を知ることができて、うれしい」などと話した。

今回の映像は、朝日新聞社が制作した子ども向けニュース「アサヒホームグラフィ」（当初はアサヒコドモグラフィ）から見つかった。ニュースは1938～43年に映画館などで上映され、戦後、連合国軍総司令部（GHQ）に接収されるなどして米国に渡った。その後返還された32回分が、国立映画アーカイブ（旧・東京国立近代美術館フィルムセンター）に所蔵されている。朝日新聞が数年前から調査・整理を進めてきた。（編集委員・石橋英昭）

デジタルに動画 ■ KHBで21日特集

朝日新聞デジタルで、約80年前の動画映像を紹介しています。21日午後6時15分からの東日本放送（KHB）「スーパージャンネルみぎ」でも、特集する予定です。



仙台・蒲生 失われた故郷映し出す